MY FIRST GIRL

ユキタテイシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＹ　ＦＩＲＳＴ　ＧＩＲＬ

【Ｎコード】
Ｎ５６９３Ｄ

【作者名】
ユキタテイシ

【あらすじ】
僕にとって不幸だったのは、２人が本当に昔から一緒にいるという事だった。好きな人。美人でバカな僕の幼なじみ。

第1話　幼なじみ

――――そして、ぼくはまた彼女に恋をする。
いろんな角度からの新しい彼女を見つける度に、きっと何度だって恋をする。

◆

「うん、うん。それでね・・」
電話のむこうの相手を優しく諭(さと)す声が教室内にここちよく響く。
午後の眠気も手伝ってか僕は聞き惚れてしまいそうだ。
まわりからの視線を一同に浴びながら、彼女はようやく気まずそうに言う。
「今、授業中なんだぁ・・」

それは五限めの古典の授業の真っ最中の出来事だ。
突然、目も冴えるようなハイテンションな着メロが教室内に流れ出す。
周囲が騒然とする中、何を思ったかその持ち主は電話を取ったのだった。

そしてあぜんとしている生徒たちを横目に相手と話しはじめてしまった。
かかり結びの法則があーだこーだと熱く語っていたところを遮(さえぎ)られたオバさん先生は、今や黒板の前で怒りのあまりプルプルと震えている。
それにしても・・

僕は全く違う事を考えていた。
年を重ねて見た目が変化しても、声というのは幼い頃からそう変わらないものなんだな・・――――

彼女の名前は中原未麻（なかはらみあさ）という。
このちょっと聞き慣れない読み方をまわりの者たちはかわいいなどと言っていたが、本人は変な名前！といつもケチをつけていた。

未麻と僕は昔から家が近所で、幼稚園から中学まで１０年以上を一緒に過ごしてきた。
子供の頃はしょっちゅう二人で遊んでいて、みーちゃんしょーくんと呼び合う仲だった。
いわゆる幼なじみというやつだ。

偶然にも同じ高校に進学となりクラスまで一緒になったのだが、このところはあまり関わりがなくなっていた。
中学当時からあか抜けていて同年代の女子たちよりも大人っぽかった未麻は、その明るい性格もあってかクラスの連中からも一目置かれるような存在となっていった。

一方僕はもともと目立つ方ではなく、勉強もスポーツもついでに顔までが平均並で、
休みの日も家でゲームばかりしているようなタイプだったから、（未麻たちグループの派手な連中から見れば立派なオタクなんだろうけど、確かにオタクだし）

高校に入ると友達も取り巻く環境も見た目も、なにもかもが釣りあわなくなっていってお互いほとんど話もしなくなった。

セーラー服からブレザーに制服を着替えた彼女は、大の自慢にしていたサラサラのロングヘアを茶色く染め、メイクにも目覚めたようで、
もともと二重で大きい目を回りをぐるっと囲った化粧でより際立たせていた。
伸ばした爪には上から派手な色を塗って、じゃらじゃらとストラップをぶら下げたケータイを常にカチカチやっているような見た目はいかにもな女子高生の誕生だ。

どんどん派手にそしてキレイになっていく彼女は、今や学年内でも有数の美少女の部類に入っている。
その容姿は他の学年の間でも噂になっているようで、3年生が入学早々に告って即効フラれただとか、そんな話もいくつか聞いたことがあった。

その後未麻には当然のように彼氏ができる。
派手な外見の彼女に似合いの、今風の男達。何人も何人も見てきた。
まるで磁石のようにくっついては離れて、名前を知らない奴もいる。
僕が知っているだけでも5、6人はいると思う。
その中の一人とキス位したかもしれない。
あるいはもっとすごい事も彼女はもうしてしまったかもしれない。
そのテの話を彼女の口から聞く事はなかった。
いつも噂で聞くだけだったから、それが本当かどうかなんて誰も知らない。

きっとみんなどうでもいいのだろうけど。

長い授業が終わって、僕はトイレに行こうと席を立った。
教室のドアを勢いよく開けると、足元に一人座り込んでいるやつが

いて僕はそれに驚き
「ぅわっ！」と思わずマヌケな声を出してしまった。
恥ずかしい・・今のはいかにもきょどってる風だったな、と情けない気持ちになった。
声を聞いた相手がこっちを見上げる。
その顔を見て僕は無意識に「みーちゃん」と呼んだ。

・・口にすると恐ろしく恥ずかしい。
一瞬で顔が真っ赤になるのが分かった。
では何と呼べばいいのか？
「中原さん」じゃああまりに他人行儀すぎる。
自分からそこまでの距離を広げたくはない。

・・・「未麻」
振り返った彼女が「変な名前」と言って笑った。
つり上がった口角から形のよい白い歯がのぞく。
よかった。昔とちっとも変わらない笑顔だ。

胃の奥の方がちょっと痛んだ。
僕は彼女の隣にしゃがみ込む。なんとなく、少しの距離を置いて。

「さっきの・・彼氏？」
「そう」
「・・授業中に電話してくるなんて無責任なやつ」

僕はまたしてもしまったと思った。
今の発言はウザくないか？しかしこれは本音でもある。

僕は見えない、敵わない電話の男に嫉妬しているのだった。
人の男悪く言わないでくれる？って怒られるかもしれない・・

しかし彼女は意外にも「ははっ、本当」と言って笑ったので驚いた。

その後、今付き合っているという彼氏の話をちょっとだけした。
と言っても僕はうん、そう、とかの返事しかしてなくてほとんど彼女が一方的に話していたんだけれども。
グチを聞かされただけな気もする。それでもいい。
まともに話をしたのはどれくらいぶりだろう？

学年一の美人と地味めな僕がこんな廊下にしゃがみ込んで親しげに話をしているなんてまわりから見たら何て思われるだろうか？

いや、そんな事は関係ない。
だって久しぶりに美麻と話せた。昔みたいに。

それだけで僕は上機嫌だった。

第1話　幼なじみ（後書き）

感想待ってます＾＾

第2話　変わってない

美麻は6限をサボると言ってそのまま帰ってしまい、まじめに授業を終えた僕は一人帰る仕度をしていると、友達の木根(きね)が一緒に帰ろうと声をかけてきた。

「おまえ中原さんと仲いいの？さっき二人で話してたけど」

僕は「まあ」とだけ答えた。

僕と中原美麻が幼なじみだということは周りにはあまり知られていない。

「中原さんってたしかに美人だけどさ、あのグループもさ、なーんか俺達の事見下してる気がするんだよなぁ」

木根も僕と同じ地味系男子だ。言っている事はよく分かる。

けど彼女を他の連中と一緒にするなよ、と心の中で思った。

彼は続ける。

「住む世界が違うってかんじ。あんま関わらん方がいいんじゃねぇ？」

午後のいい気分は悪気はないが、奴の一言によってぶち壊しとなった。

確かに美麻はいつもどこかけだるそうで澄ましてる感じはするが、でも僕は知っている。

本当は負けず嫌いですぐ熱くなる一面もあるって事を。

昔から誰よりも純粋でまっすぐな彼女を。（ついでに厚化粧だが実はすっぴんの童顔を気にしていることも。）

今日話してみてよく分かった。見た目は変わっても中身はきっと変わってない。
僕が好きなままの彼女だ。

『あんま関わらん方がいいんじゃねぇ？』
余計な事だよ、僕は思った。

ここは中学の頃みたいに平等じゃない。
派手にしてる奴らは自分たちが基準だと思っていて、地味な奴らの上に立っている気分だ。
自分と対等か、上だと判断した人間には媚(こ)びを売って仲良くする。
そうして自分達の居場所を確立していく。
それはなんだかうんざりする様な光景だ。

きっとこれから僕たちが出ていくであろう社会にも似たような景色が広がっているんだろう。学校は小さな箱で、社会というものを凝縮している世界だと思う。
現に学校の中ですらもう社会が成り立っているのだから。

美麻は所属としてはその「社会」の上側にいるわけなのだが、グループとは一定の距離をとっている様で、なんと言うか染まりきってない感じがした。
自分から一人で過ごしている事もよくあったので、話しかける時は彼女が一人でいる時にするようにした。
実はあれからなんとなく話す機会が増えてきて、僕はうれしかった。

今日は昼休みに裏庭で昼食をとっていたので、そこに行って話すことにした。
窓から見るとベンチに一人座る美麻の背中が見えた。
僕はかけ足で階段をかけ降り、うわばきをはいたまま芝生を歩いて

いった。
前から気になっている事があったのだ。
「また痩せた？」
彼女は昼食に紙パックの牛乳を片手にメロンパンをかじっているところだった。
それだけで足りるのかよと僕は思った。
そうだ、未麻は痩せている。短いスカートからのぞく足はまるで棒のように細かった。
背はけっこう高いのに全体に線が細く胸もない。
僕は痩せすぎだと思うが、しかしクラスの女子たちからはスタイルがいいと憧れられているようだった。

「ちゃんと食べてんの？」僕は聞いた。
「食べてるよ」美麻が答えた。
甘いものが大好きで、寝るギリギリまで菓子を食べているという変な習性がある。
どうせ菓子ばっか食ってんだろうなと思ったが何も言わなかった。

彼女には母親がいない。
幼い頃に、――まだ僕とも出会っていないくらい昔に――離婚して出ていったらしい。
ほかに兄弟もいないのでずっと父親と二人で暮らしている。
美麻の父はおだやかな感じの人で、娘とは正反対の豊満な肉付きのちょいハゲてはいるが、彼女をとても大切に思っている優しい人だ。
仕事は普通のサラリーマンだが、彼女のじーさんだかばーさんだかが金持ちらしく生活はそれなりに裕福なようであった。
僕は、あの父に似ていない美麻を母親似なんだろうと思っているが、彼女は母親のことはほとんど口にしなかったので僕からも何も言わ

ないようにしていた。

母がいないので炊事やその他家のことはほとんど彼女がしている。おじさんはあの体を見れば食べるには問題なさそうだが、自分の事はちゃんとできているんだろうか？

食べるとは言っても、栄養バランスはちゃんと取れているのかと心配になる。

昔それを本人に小うるくさく言うと「父さんみたい」と一言言われた。

脳裏によく知るおじさんの顔が浮かんだ。僕が複雑な気分になったのは言うまでもない。

そうだ、昔から野菜ギライで、小学校での給食もいつも居残り組だった。

チャーハンに少しだけ入っているピーマンが食べられないばかりに昼の授業が終わってもいつまでも座っていなければならないのだ。はしをにぎりしめたままひたすら皿とにらめっこをしている彼女を見兼ねて代わりに食べてあげたことが何度もある。

僕は今でもピーマンを見る度にあの半泣きの未麻の顔が思いだされてきて、こみ上げてくる笑いを抑えるのに大変だ。

第3話　目覚め

僕にとって不幸だったのは、彼女を本当に昔から知っているという事だった。
「その事」に気付いたのは小5の時だった。
その年の夏休み前にちょっとした事件があった。

ある日の体育の授業中、僕は美麻のズボンが汚れているのに気が付いた。
それを教えてやるとなぜか彼女は真っ赤になって逃げていってしまった。
後になってだが、女子には生理というものがくるのだと聞いた。

その頃、僕らの間では「トマト作戦」という変な遊びが流行っていた。
放課後になると裏山の畑から盗ってきたトマトをぶつけ合う単純な遊びだ。
追いかけっこだから鈍い者はたちまちトマトまみれにされる。
足が遅い僕はいつもトマト染みだらけになって帰っていたので母にしょっちゅう怒られていた。
美麻は一人男子に混ざって優秀なトマト作戦のメンバーだった。
ある日、普段はズボンしか着ない彼女が珍しく白のワンピースを着てきた。
今とは違い、髪が短く真っ黒に日焼けしたその姿は少年にしか見えなくて、
僕は裾(すそ)のヒラヒラが風に吹かれるのを見る度になんとも言えない違和感を感じていた。

帰り道みんなでいつものように畑に行きトマトを投げ合った。

参加したがらない美麻に理由を聞くと服が汚れるから、と言った。
男子特有の気恥ずかしさや照れもあったのだろう。
僕らは幼稚な行動に出た。
「生理だ、生理だ！」とはやしたてながらターゲットを美麻に絞り攻撃した。
熟したトマトがワンピースの白にはじけとび、本当に血のようになった。
いつものごとく鬼の形相でトマト片手に追い掛けてくるのを僕らは待った。
しかし彼女はわぁと泣き出してその場にしゃがみ込んだ。
僕達は皆ただただ驚いて立ち尽くしてしまった。

・・・そんな事があった。

あの時、なんでか僕は無性に恋しい気持ちになった。
泣いている彼女に駆け寄り、抱きしめたいと思った。
そしてその夜は眠れなかった。
誰かのことについてこれほど胸が熱くなる思いをしたのは初めてだった。
これまで他の男子達とかわりなく思っていたのに美麻が女の子だという事を改めて知った。
彼女のことが急に弱く、はかなく、愛しく見えてしまう。
自分にそういった感情が芽生えた事に驚き、僕は戸惑った。
そして戸惑いがいつしか胸の高鳴りへと変わっていくうちにこれは恋なのだと気が付いた。
それは間違いなく僕にとっての初恋だった。
あの一件でトマト作戦のブームは過ぎ、美麻とはしばらく気まずい

日々が続いた。
ある時何がきっかけだったか彼女の方から普通に話しかけてきて、
僕も普通に受け答えをしたのでそれでやっと元の友達に戻った。
変わったのは僕の気持ちだけで、あれからもう5年も片思いを貫いていることになる。

僕が未麻の背を追い越したのは中2の夏だった。
それまでの僕は朝礼でいつも一番前にされるようなチビで、未麻からも友達からもよくからかわれていた。
僕自身、好きな女の子よりも背が低いことにコンプレックスを抱いていたが、
夏休みダラダラと寝てすごしていただけで10センチ近く背が伸びてあっという間に彼女を追い抜いた。
もちろん僕は飛び上がるほどに喜んだが、彼女にしてみればそれがしゃくに障ったようで一時口を聞いてもらえなかった事がある。（あの時は本気でへこんだ）

そして夏が終わり、彼女の機嫌もようやくなおった頃、美麻に初めての彼氏ができた。
名前は忘れてしまったが、同じクラスの僕も知ってる奴だった。
そいつとはすぐに別れたようだが、彼女がモテだしたのはその頃からだと思う。

中学時代はそうやってだんだんと距離ができていき、高校で別々になって終わるのかと思っていたら同じ高校を受験すると知って驚いた。

◆

高一の夏が近づいていた――――６月。
僕の身長は１７２センチまで伸びてとりあえず止まっていた。

窓際の席。
差し込む日差しが彼女のカラメル色に染めた髪を縁取ってキラキラと輝いている。
それを後ろからぼんやりと見つめ、退屈な授業をやり過ごすのが僕のいつもの光景だった。
しかし未麻は今日もいない。
丸まった小さな背中のかわりに、座り主のいない机がぽつんとそこにあるだけだった。

このところの彼女の様子はおかしかった。
だるそうにしているのはいつものことだったが、学校を何日も休んだり来たりを繰り返していた。
担任も、彼女とつるんでる奴達も詳しくはわからないみたいで、このまま学校を辞めるんじゃないかという噂までたち始めていた。

一週間も休んだある日、久しぶりに登校したと思ったらなぜか金髪になっていた。
最初、外人が入ってきたのかと思った。
髪を茶色く染めてる奴はうちの学校にもけっこういるがさずがに金髪は居なかったので、先生たちは驚いて彼女は当然のように職員室に呼び出される。
僕はというと心配だったのでこっそり職員室の前で未麻が出てくるのを待っていた。
と、いきなり扉が開いて本人が出てきたので驚いた僕は隠れきれず、あっさりとバレてしまった。

不機嫌そうな表情の彼女と目が合ってしまい、しどろもどろになった僕は「似合うね、それ」と我ながら間抜けな事を言った。

未麻はなにも答えず気まずい空気が流れたがやがて憮然(ぶぜん)とした顔で

「あたし、学校辞める」

と言った。

第４話　月とブランコ

未麻の学校辞める発言に周囲は騒然となったが、先生達にはあっさり却下されていた。
髪を染め直すようきつく言われたらしく、とりあえず髪色をもとの茶色に戻し彼女は学校にやって来た。
あれは一体何だったのか、その後は相変わらず遅刻は多いものの学校にも来ているし、あの日のことは僕も、周りも気にしなくなっていった。

ある日の帰り道、公園の横を歩いている時だった。
僕はブランコに座る派手な後ろ頭の未麻を見つけた。
それまで本屋でも寄って行こうかと話していた木根だったが、彼女に気づくと「やっぱ俺帰るわ」と言ってそそくさと帰っていった。
奴なりに気をきかせてくれたのだろうか？
いや、どうも木根は未麻の事が苦手らしい。
木根が見えなくなるのを見届けてから僕は公園に入って行った。
ここは昔よく未麻と遊んでいた公園だ。
久しぶりに足を踏み入れたが当時慣れ親しんだすべり台もブランコも今ではすっかり小さく見える。

さて、どうしたものか・・この人は。学校休んで、こんな所で。
こんなダボダボのジャージみたいな格好で。

「何してるの」
と僕が声をかけると彼女は振り返ってへへへと笑った。
目は垂れさがり赤く染まったほっぺたが幼い頃の姿を思い出させた。
これは明らかに酔っ払っている。

足元を見ると、チューハイの缶がひとつ転がっていた。
僕はやれやれという気持ちになって深くため息をつく。
缶を起こすと中身が半分以上残っていた。
まったく、酒なんて飲めないくせに。
何か面白くない事があるとこうして飲みたがるのだ。
僕はブランコに腰掛けた。

夜風に晒(さら)されて連結しあう鎖がギシッと音をたてた。
足を引きずりながらブランコをこぎ、美麻が話はじめる。

「ナオトがねぇ・・」

ナオトというのは今の彼氏の名前だ。
たしか年は3コ上で大学生だったが、ほとんど学校に行かずフリーターの様な生活をしているらしい。
僕はそいつの顔を見たことがないが、きっと今風のちゃらちゃらした奴なんだろうなと思う。
美麻いわく、モテるタイプの男でここ最近はそいつの女関係に悩んでいるようだった。
僕は彼女のこういった相談にはもう慣れてしまったので、話を聞いた上でうまく切り返す方法も身につけていた。
全く妬けないと言ったら嘘になるけど。

彼女の長い話を簡単に説明すると、ナオトが別の女と頻繁に連絡を取っているのが気に入らないらしく、しかもこの女というのがかなり嫌な奴らしい。
（ナオトのヤロー・・）
美麻というものがありながら他の女とも付き合うとは。
僕は心の中で悪態をついた。

ど派手な髪色にキツめの化粧をして、ぐだぐだに酔っ払っている彼女はどうやっても高校生には見えなかった。
地味系男子代表の僕と夜の公園で二人語りあう姿はたぶん異様でもある。
しかしこんな話を聞いていると本当にどこにでもいる普通の女の子なんだなといつも思う。
何日も学校を休んだり金髪になる意味はさっぱりわからないが、彼女なりに真剣に恋と向き合っているのかもしれない。
相手の事に一喜一憂し、グチやのろけを僕に話してくれる、そんな彼女を見ているのは不毛だが面白くもあった。
恋をしている彼女はいつにも増してキレイなのだった。

――――そして僕もまた美麻（かのじょ）に恋をする。
いろんな角度からの新しい姿を見つける度に、きっと何度だって恋をする。
それをずっとそばで見ていたいと思う。
分かっている。
そんな事はありえないし、このままでは僕はいつまでたっても片思いだ。
けどたぶんそんな風にしかできない。

「あたしエッチはしてもキスはしないの」

唐突に、彼女の口から発せられた言葉だった。
それまで沈黙だっただけに一瞬何のことか分からずに僕がぽかんとしていると「本気で好きな相手とじゃないと嫌」と付け加えた。
その口ぶりからそーいう事をもうしてるんだなと僕は思いそしてへこんだ。

分かってはいたが実際に聞くとなるとやはりショックは受ける。
ふざけているのかと思い彼女を見たがいたって真面目な顔をしていた。

生ぬるい夜の風にさらされているその赤い頬を眺め、横顔がやはりキレイだと思った。

「エッチはしてもキスはしない」・・・？
それらをどうして同じ秤(はかり)にかけられるのか？
唇を合わせるだけのキスと体でつながるセックスとでは比べ物にならないと思えるんだが・・・さっぱり分からない。

困った僕は「どっちもしたことないから分からねーよ！」と叫びたかったがやめた。
相手は酔っ払いだし、この手の話を聞かされるのはいたたまれない気持ちだ。
そしてこの生々しい話題から抜け出そうと、この前彼女が言っていたことを思い出したので聞いた。

第5話　約束

「学校辞めてどうするの？」
美麻はぱっと顔を上げて僕を見つめ、ふにゃ～と表情を崩した。
少し考えて、
「どうしよっかな。
　うん、しょーくんのお嫁さんになる♪」

その能天気な態度に思わずカッとなってしまい、「ふざけるなよっ」と僕は軽くどなってしまった。
驚いた未麻は目をまん丸くしている。
すぐに我に返ってごめんと謝ったが、彼女がしょんぼりとうつむいてしまったので僕は激しく後悔した。
しまった・・でも冗談でもこんな事を言われるとつい熱くなってしまう。

ずいぶん昔の事になるが、前にも似たような事があった。
二人が幼い頃よく遊んだこの公園で、彼女は何て言ったか覚えているだろうか？
僕は絶対に忘れない。
１１年前、まだ5才だった彼女は僕の、「しょーくんのおよめさんになりたい」と言ったのだった。
そうそう、思い出した。
おもちゃの指輪・・確かピンクの、それを未麻の指にはめて渡したんだった。
大人のプロポーズを見よう見まねでやっていた気がする。
恥ずかしすぎる。
なんてませた子供だったんだ。

あの頃の勇気が今少しでもあったなら未麻との関係も違っていたかもしれない。

そうだ、思えばあの時僕達は両思いだった。
あの頃は、毎日当然のように一緒にいて何も気付かず遊んでいればよかったのだから、
無知だった小学校時代に彼女をからかい傷つける事も、
中学で距離ができていく事も、高校に入って不毛にも恋の相談相手になる事も知らなかった。

しかし現在、未麻は僕の気持ちを知らないし、第一そんな前の事を彼女が覚えてる訳がない。
昔はあんなに可愛らしかったのに今はこんなになってるんだから反則だよなぁ、と僕は苦笑した。

「見て、ナオト。いい男でしょ？」

未麻がずいっと目の前にケータイを突き出してきて言った。
2人で撮ったらしい写メールが待ち受け画面になっていた。
未麻が雑誌に出ているようなギャルなら相手もギャル男という感じだった。
この男が・・美麻の。
彼女のタイプの男ということで強そうで、かなりこわもてな人物を想像してたが、ナオトのイメージは違っていた。
確かにモテそうだ。
彼女と並んでいても見劣りはしない、お似合いのカップルという事か。
2人してケータイのカメラに向かってVサインを作っているのがなんだかバカっぽいなと少し思った。
自慢の彼氏を僕に見せて彼女はうれしそうだ。

だから僕も興味ありそうに振舞う。
本当の気持ちを隠して笑う。
彼女の恋の悩みを聞きながら不毛だと嘆く反面、これでいいと思っている自分がいるのも確かなのだった。

いつか好きだと伝える日が来るのだろうか？

僕は酔っ払い未麻を家まで送って行った。
出迎えた彼女の父は申し訳なさそうに何度も謝った。
帰り道、空を見上げると大きく見える月がいつもより近くに感じた。
手が届きそうなくらいだ。
もちろんどんなに昇っても月に触ることはできない。
向こうにしてみてもこっちに届こうなんて気持ちはさらさらないから、きっと近づいた分離れて行ってしまう。
こうして見上げているだけで満足なのか、それとも月を手に入れ自分だけのものにしたいのだろうか、
僕はどうしたいんだろう？

第6話　目撃

ある日の放課後だった。
本屋に行こうという木根の誘いを断り、一人で帰っている時だった。
僕はぼんやりと歩いていたが甲高い女の笑い声が、すれ違う車の音よりも響く大きさで耳についたのでふと現実に引き戻された。

顔を上げると、道の向こう側にカップルがいて、声はその女のものだった。
僕は一緒にいる男に確かに見覚えがあった。
数日前に美麻が彼氏だと言って見せてきた、あの待ち受けの男だった。
楽しそうな雰囲気としっかり絡められた指を見ると二人の関係は安易に感じ取れた。

どういう事だ？あの男は美麻の彼氏じゃなかったのか？

翌日、未麻はきちんと学校に来たので僕は彼女を待ち、一緒に帰る約束をした。
余計なお世話だと思われてもどうしても見過ごせない。

僕たちは駅前のマクドナルドに入った。
普段ならまず行かない所だ。
店内は放課後の中高校生達でごった返していた。
奥のレジカウンターでは店員が声を張り上げながらせわしなく働いている。
僕達はハンバーガーとポテトとコーヒーを買って、二階へ上がった。
窓際のソファ席に美麻が腰掛け、僕は向かいのいすに座った。

何と言えばいいのか。
勢いに任せて来たはいいがどう切り出すのか考えていなかった。
お互い無言で食事を始める。
賑(にぎ)やかな店内で僕ら二人だけが浮いている様だった。
かぶりついたハンバーガーは味がなく、口が渇きコーヒーで流し込んだ。
僕はようやくしどろもどろになりながらも街でナオトを見かけた事、一緒にいた甲高い声の女の話をした。

「それ、こないだあたしが言った女だよ」

と意外にも未麻は平然としていた。
ナオトが連絡を取っている女について、かなり嫌な奴なんだよねと言っていたのを思い出した。

「あいつが美麻だけじゃないって分かってるんでしょ？」
「知ってるよ。でもそれが何？」
しおれたポテトを口に運びながら言う。

「何って・・そんなのだめだろ。」
美麻というものがありながら他の女とも付き合うなんて許せない。
僕は冷静な口調を保ちつつも内心はかなり焦っていた。

「あたしが好きになったんだから、ナオトは悪くないの。」

「でもいいの？こんなままで」
「よくないけど・・・」
「だったら別れればいいだろ」
つい荒い口調になってしまったのに自分でも驚いた。
「だって」

埒があかない。
「でも・・」僕は食い下がった。ムキになっていたかもしれない。
「てゆーかあんたに関係ない」
ハッとした。
顔を上げると未麻は表情こそ冷静だがその目は怒りの色を含んでいた。
これ以上は踏み込むなという拒否のサインでもあった。
もう何も言わない方がいい。この話は終わりにしよう。
彼女を怒らせてしまった事よりも、あんたと呼ばれた事よりも「関係ない」と言われた事の方がショックだった。
いくらこちらが近づいて行っても断ち切られる一言を言われればそれまでだ。
僕はあんたの事が好きなんだから関係あるよと言った所で何も変わらないだろう。
沈黙になってしまった。
謝るべきかどうか悩み、冷めたコーヒーに手を伸ばした時未麻が口を開いた。
「今度さ、ナオトの彼女から会おうって言われてるんだけど」
意外な話題に驚いた。
一人の男をめぐって女が二人会ってどうするのだろうか。
「あたし行きたくないから
しょーちゃん代わりに会ってきてくれない？」

・・・意味が分からなかった。
その女も未麻と会って何を話すつもりなのか分からないが、代わりに僕が行く意味はますます分からない。
それこそ僕には関係のない相手だ。
もちろんなんで僕がと言うつもりだった。

しかし言えなかった。
僕は断りきれず美麻の代わりにその女、リカコに会いに行くことになってしまった。

第7話　リカコ

なんだか自分がどんどん面倒な事に巻き込まれているような気は・・すごくある。
それまで当たり前と思っていた平和で平凡な毎日が少しずつ遠ざかっていくような。

そして約束の日がやって来た。
未麻は前日の夜に、「明日はよろしくね」といった内容のメールを送ってきただけだった。
やっぱり断るべきだったと後悔しつつ僕は重い足取りで家を出て電車に乗る。

美麻の言った通り駅前の柱の横に少しぽっちゃりした女が立っていた。
間違いなく街でナオトと一緒にいた女だった。

僕は恐る恐る近づいてまずあいさつをし、都合が悪くて来れない（ウソである）美麻の代わりに自分が来た事を伝えた。

「はじめまして。君が美少女の代わりの人？」

近くで見る彼女の顔は色白でどちらかというと地味な見た目だった。
美人でもないしブスでもないが、美麻の方が百倍はキレイだと思った。
てっきり文句の一つでも言われるかと覚悟していたが相手の態度があまりにも普通だったのでなんだか拍子抜けしてしまった。
美麻が来ない事に怒っている様子はなかった。

僕達は近くのコーヒーショップに入って話す事になった。
注文を待っている間、妙な事になったと思っていた。
なぜ僕がナオトの彼女と二人でお茶をしなければいけないのか・・
周りの客からじろじろと見られているような気がしてなんとなく落ち着かなかった。
そんな事を考えているとふいに彼女が甲高い声で話かけてきた。

「あたしリカコ。名前は？」

人見知りとは無縁の性格らしい。
少し安心した。
僕のような挙動不審ぎみの人種が珍しいのかじっと見つめてくる。
よく見ると愛嬌のある顔をしていた。

「君が美少女の彼氏くん？」
「かっ・・彼氏じゃない」

ついどもってしまった。
リカコはニヤニヤしている。
しまった。僕ってそんなに態度で分かるのだろうか？
たまらずごまかそうとしてコーヒー啜(すす)った。
彼女はバッグからタバコを取り出し、断りもなしに僕の目の前で吸い始める。
フーッと煙を吐き出す様子は妙に貫禄があった。
僕は煙をもろに吸い込んでしまいむせそうになった。
そしてリカコはそれまでと違うやや真面目な顔付きになってしゃべり始めた。

「あの子に忠告、ナオトはやめといた方がいいよ。本気になる男じゃないよ」

意外な事を言うと思ったが、それは僕も同感である旨を伝えた。
すると彼女は「へ～うちら気が合うじゃん」と妙な事を言った。
美麻は彼女の事をかなり嫌な女だと言っていたが実はけっこういい人なのかもしれないなと思った。

「だってリカコも本命は別にいるし。まぁ悪い奴じゃないんだけどね」

最後にナオトへのフォローも忘れなかった。
自分の事を名前で呼ぶのはちょっとバカっぽい気がするが・・・。

それから少し雑談などをした。
彼女の話はほとんど分らなかったので僕はうわの空だったが、本人はそんな事は全く気にしていない様子でしゃべり通した。
コーヒー代をリカコが払ってくれて僕達は店を出た。

ナオトという男については最初からいい気はしなかったが今日彼女の話を聞いてよりいっそう実感した。
あまり言いたくないが未麻はそいつに遊ばれているんじゃないか。

ケータイを開くと美麻からメールが来ていた。

第8話　追跡

その後二人で公園で会う事にした。
先に待っていた美麻は公園脇にあるベンチに座っていて、僕が来るのに気付くと

「どうだった？」

とさっそく聞いてきた。
僕はリカコと話した内容、彼女が思ったよりも悪い印象でなかった事、そして最後に言った忠告もちゃんと伝えた。
ナオトへの反感もあり、リカコの肩を持ち過ぎる位に説明に力が入ったが、美麻はそれらを素直に聞き、
「あたしも誤解してたかもしれない」
と言った。

彼女の中でリカコの印象が少し変わったのかもしれなかった。
こういう時素直に自分の否を認める潔さが彼女にはある。
普段は割とひねくれてるくせに偉いなと思う。
最後に「代わりに行ってくれてありがとう」と言った。

美麻といい、リカコといい：最近の僕の周りはなんだか賑(にぎ)やかだ。
木根とかといると毎日が平和で平凡なのに美麻たちと関わっていると出来事まで派手になってくる。
僕は極力目立ちたくないタイプなので、こうもいろんな事に巻き込まれるのは正直疲れてしまう。
地味系男子にはハードルが高すぎるのだ。

美麻は今度の休みにナオトと会い、問い詰めてみると言っていた。

僕はあぁそう、と一度は聞き流したがなぜだろう、自分でも本当によく分からないのだが当日は昼間からいそいそと出かける準備をした。
面倒な事になると分かっているのにどうしても気になってしまい、こっそり後をつける事にした。

駅で未麻が来るのを待ち、電車に乗るのを見て僕もついて行った。
夜の渋谷はどこも人であふれかえっていた。
街を行く人々は皆薄着で、近付いてくる夏を心待ちにし浮かれている様にも見えた。
クラスの中には休みの度に渋谷で遊ぶ者もいるようだが、僕にはまったく縁がない場所だ。

駅前に出ると、テレビでしか見た事がない細長いファッションビルやスクランブル交差点を目の当たりにする。歩く途中で何度も人と肩がぶつかった。
街を歩くだけなのに、何か強い意思を持って挑まないと人の流れに飲まれてしまいそうになる。
僕は何度か見失いそうになるが、派手なピンクのワンピースを目印に追った。
そしてこれだけの人がいても彼女はどこか存在感があり、目立っていた。
駅前は待ち合わせ場所になっているのかたくさんの人で賑わっていた。
未麻がその中へ入って行き、向った先に数人の男女のグループがいて更にその中にナオトらしき男がいた。
一緒にいる仲間のリーダー的存在なのだろうか、彼は目立って見え

る。
深くかぶったニット帽の間からは金髪が見え、僕は未麻が突然髪を金色に染めて学校に来た事を思い出した。
未麻に呼びかけられ、彼が立ち上がった。思っていたより体は細く、背が高い。
きりっとした顔立ちは女達から受けがいいだろう。これは確かにモテそうだ。
そうか、僕は今ナオトに嫉妬を感じているらしい。
遠くから相手を冷静に観察しながらも、腹の奥底でひそかに闘志を燃やしている自分に驚いた。

しばらく仲間と談笑をしていた様だったが、やがて軍団を離れて美麻とナオトが二人きりになった。
僕もつかさずついて行く。
暗がりでよく見えない。
お似合いの、仲のよさげなカップルだった。
二人の影が近付くとキスをしているようにも見えた。
僕は何をしているのだろう。こんな所まで後をつけてきて、ストーカーまがいな事をして。
今更ながら自分が虚しく思えてきた。
もう帰ろうかと思い背を向けた時、未麻の荒らげる声を聞いて僕は振り返る。
いちゃついているのではないらしい。
何か言い争っている様子だった。男は冷静に対応するも美麻が一方的に問い詰めている感じだった。
と、不意にナオトが彼女の胸ぐらを掴んだ。
そして手を振り上げ、美麻の頬を叩くのを見えた。彼女の体がよろめいた。

僕は目を疑った。力で勝る男が女を殴るというのか。信じられない。

好きな人が目の前で、他の男に叩かれていたら体も飛び出すというものだろう。

「手を離せ！」

言うよりも先に僕は走り出していた。

第8話　追跡（後書き）

マイペースに更新していきます。。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5693d/

ＭＹ　ＦＩＲＳＴ　ＧＩＲＬ

2010年10月15日21時16分発行